九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中留武昭監修，八尾坂修・増田健太郎・伊藤文一編著，『信頼を創造する公立学校の挑戦-壱岐丘の風がどのように吹いたか-』，ぎょうせい，2007年，全188頁

濱田，恭平
九州大学教育学部 | 九州大学人間環境学府修士課程

https://doi.org/10.15017/15659

出版情報：教育経営学研究紀要. 10, pp.103-103, 2007-05-31. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law, Graduate School of Kyushu University
バージョン：
権利関係：

教育経営学研究紀要　第10号　2007年　103－105

中留 武昭 監修　　八尾坂 修・増田 健太郎・伊藤 文一編著

『信頼を創造する公立学校の挑戦－壱岐丘の風がどのように吹いたか－』

（ぎょうせい、2007年、全188頁）

濵田　恭平

「信頼」という言葉が公教育のキーワードとなって久しいが、本書は「信頼を創造する公立学校の挑戦」と銘打ち、公立中学校を対象に「多様な研究方法による分析の試み」と「一つの学校の実践事例を一般化させていく試み」を為すことをその目的とした。そこで、事例校の教職員・地域住民等がその変容に影響を及ぼしたであろう事項等を報告し、事例校に対して有識者が学問的見地から分析を加え、これら２方向から分析を行うことで、事例の一般化が試みられている。本書は、実践報告と学問的分析で構成されている。まず、管理職、主任、養護教諭、スクールカウンセラー、講師などの学校教職員や公民館館長・自治協議会会長などの地域住民から実践報告がなされ(第Ⅰ部)、次に、教育経営学・教育方法学・教育心理学・臨床心理学等、学際的で多角的に分析が行われている(第Ⅱ部・第Ⅲ部)。その結果、どのような手だてが具体的に行われ、かつそのときの各教職員の心情や考え、そして、それを分析していく研究方法が明らかになった。

第Ⅰ部では、第１章から第６章まで順に、校長、前教頭、主任、大学講師、公民館館長等の地域住民、スクールカウンセラーらによって、事例校の変容と実態がそれぞれの視点から直接体験を通した現場の声として叙述されている。第Ⅱ部では、まず、本中学校校長が学校通信で用いた単語を対象にしてテキストマイニングによるビジョン分析が(第７章)、次に、校長の１日の勤務時間内と勤務時間外において、校長がどの場所にどれだけの割合時間いるのかが(第８章)、さらに、学校側からの情報リソースの提供によって影響を受けたであろう生徒・保護者の学校への認識が(第９章)、最後に、校長へのインタビュー調査等を基に校長のリーダー行動が(第10章)、それぞれ分析されている。第Ⅲ部では、まず、事例校におけるカリキュラム開発における成果と課題、授業事例の特徴が(第11章)、次に、学力・学習意欲の変容における事例校の成果が(第12章)、さらに生徒へのストレスマネジメント教育の導入とその結果が(第13章)、最後に「学校力」の観点から(第14章)、指摘・分析されている。

最後に、本書全体を通して明らかになったことを包含しつつ、本書の価値を大きく３つに分けて述べたい。一つ目は、一つの実践事例の報告を単なる報告で終わらせず、現場の教職員の声を自かに届けたことによって、独りよがりな、教職員の報告でも研究者の研究報告でもなくなり、双方向的な事例分析が行われた点である。つまり、一学校に関わる多くの方面から報告され、学際的で多角的な分析されたこと、それによって「一つの学校の実践事例を一般化させていく試み」た実証性の高さが挙げられる。二つ目は、第Ⅱ部・第Ⅲ部で紹介された研究方法の可能性を見出した点である。それらはそれぞれ研究上の課題も明示され、今後の研究において主要になっていくことは疑いようもない。三つ目は、本書において重要な示唆が数多くなされた点が挙げられる。例えば、「校長のリーダー行動による信頼形成を(中略)過大に評価することになりかねない」(p.138)という点であるが、ともすれば信頼形成や学校改善がなされた要因を校長のリーダー行動に限定し、実態を見えなくしてしまうことを喚起している。また第８章「校長の一日」では、「学校外環境要因とのネットワークの構築」の重要性と学校内外の職務割合は考慮しなければならないことが指摘されている。以上のことから、今後、本書の研究方法等が参考にされ、後継研究が行われることが期待される。